

# 菊の栽培と

## コーティング肥料の利用

～現地からの報告～

静岡県富士市柳島

村瀬長生

### 1. はじめに

施設菊と、露地菊を主体にした菊専作経営が、私の家の経営内容である。

露地菊は、水田利用として7月上旬定植、10月下旬から11月下旬までの収穫となる。昭和45年当時までは、当富士市田子浦農協管内でも、かなり盛んに栽培されていた。特に11月上旬咲の「ウィリアム・パター」という品種は、市場性も高く、京浜市場では富士のパターとして数多くある菊の中でも最高級品として、高く評価され、人気の的であった。

しかし、都市化の波は、当地においても例外ではなく農地は宅地化、工場用地としてどんどん減少し、それにともない、農家の生産意欲も減退し、菊作りをする人もだんだんと少なくなって、現在では、ほんの数人となってしまったというのが現状である。

### 2. 我が家の菊作り現況

我が家の施設菊作りは、ガラス温室で親の代から行っていたが、戦前戦後を通じて「東の光」の暮出荷や、昭和26年頃から始った電照抑成栽培を行ってきた。昭和51年以前のビニールハウスから、大型のアクリルハウスに建て替えて、現在の経営規模としては、施設2,500㎡の年2作型と、先に述べた露地菊の2,000㎡である。

施設の作型としては、10月定植、3月の彼岸出荷の挿穂冷蔵による電照加温栽培と、その後作として、4月上旬定植、7月出荷のシェード菊であるが、その中でも最も重点的に力を入れるものは、彼岸出荷の電照加温栽培である。

昭和45年頃までは、3月の彼岸の菊といえば、渥美半島で作られる、無加温の電照抑成栽培によるものしかなかった。しかし、無加温で長い期間ゆっくり栽培された抑制ものと、短期間で、高い温度で促成栽培されたものでは、市場評価が異なる。

加温促成された夏菊は新鮮さはあるが、草姿のボリュームに欠ける不利な点がある。また無加温抑成菊は主茎が、人の指ほど太く育つが、加温促成夏菊の場合は、せいぜいその半分位である。無加温抑成栽培の場合、冬の自然環境の下で栽培するので、どうしても老朽化した新鮮さのとぼしいものになってしまう。

市場性から云って、新鮮さも要求されるが、特に、草姿のボリュームが要求される。

そこで考え出された栽培型が、秋菊の挿芽冷蔵による電照加温栽培である。この方法は、最高の条件下で栽培されるので、草姿のボリュームは云うまでもなく、新鮮さも保持できることから、当然、市場価値も高く評価される。

栽培の特色として、生育期間が長いと云うことが、草姿のボリュームをつける一番大きな要因であり、加温し花芽分化させることにより、花芽分化から開花までの日数が、抑成栽培にくらべ短いために、新鮮さが失なわれにくいと云える。

私の土地は富士川の沖積地帯で、土質は良く肥えた粒子の細かい埴壌土で、地下水が高く、下層には粘土質の層と非常に細かい砂の層があるために、水の上下への移動が少ない、排水の悪い土壤条件である。

このような土壤条件なので、定植後の水管理など一切なく、冬期など、定植から開花まで、灌水は一度もやらずに済んでしまう。そこで施肥設計も、追肥などをやらずに、基肥100%の方法で栽培している。全量基肥なので、どうしても肥効の長い有機質肥料に頼ってきた。以前は菜種粕、魚粕などを使用していたが、最近では手軽に入手でき、かつ価格の安い鶏ふんを使っている。

しかし、ここにも問題がある。腐熟の際に発酵ガスが発生するにともない、悪臭と大量に発生するハエの群に悩まされている。近年は、ハウスの周囲にも家屋が建並び、近所はかなり迷惑をかけているのではないかと思われる。

このような折、チッソ旭肥料㈱から、肥効期間が非常に安定しているコーティング肥料が開発されたので、我家のように、全量基肥の肥培管理方法における利用の可能性について検討した。栽培試験方法並びに結果については、以下2に示す「コーティング肥料の利用試験」のとおりである。

### 3. コーティング肥料の利用性試験

1) 試験期間 (昭和50年10月23日～昭和51年3月20日)

2) 試験内容

④ 試験規模 圃場13.2㎡/区 3連制

㊤ 菊品種 清明の光

3) 試験区の設計 (kg/10a)

色があせるようなことがあるが、そのような心配は全然なかった。

試験区	供試肥料	基 肥			追 肥			備 考
		N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	
A 対 照 区	菊用有機配合	14.0	10.9	10.9	—	—	—	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> 、K <sub>2</sub> Oの補正は過リン酸石灰、硫酸加里で施用した。  ※Total-Nに対しN比20%ブレンド
	緩効化成	—	—	—	14.0	14.0	14.0	
	燐 硝 安 加 里	—	—	—	12.0	7.5	10.5	
B コーティング100型	過リン酸石灰	—	14.1	—	—	—	—	
	燐 硝 安 加 里	40.0	<sup>W-P</sup> 9.2	33.8	—	—	—	
	過リン酸石灰	—	<sup>C-P</sup> 37.3	—	—	—	—	
C ※ 燐 硝 安 加 里	硫酸加里	—	—	1.7	—	—	—	
	コーティング100型	32.0	<sup>W-P</sup> 7.4	27.1	—	—	—	
	燐 硝 安 加 里	8.0	5.0	7.0	—	—	—	
	過リン酸石灰	—	34.1	—	—	—	—	
	硫酸加里	—	—	1.4	—	—	—	

また、その後作として栽培した7月咲の菊も、追肥を全くやらずに良品を生産できたことは、肥料の流亡などが少く、効率良く作物に吸収されているものと考えられた。従来有機質肥料のように悪臭やハエの発生もなく、ハウス内の環境も大巾に改善された。

施肥量は10a当りN-P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>-K<sub>2</sub>Oとして40-46-35kg相当を全層に混合施用した。

4) 試験成績

① 草丈 (cm)

試験日	日数	61日目	91日目	122日目	146日目
A		34.0	59.0	98.0	103.0
B		31.6	56.0	98.7	105.0
C		35.5	61.0	99.4	109.0

② 重量 (g/株)

試験区	収量	新 鮮 重					乾 物 重				
		32日目	61"	91"	122"	146"	32日目	61"	91"	122"	146"
A		18.0	50.0	117.9	152.7	174.3	1.8	4.7	10.8	35.8	39.4
B		16.9	50.0	118.6	154.3	181.0	1.6	4.8	10.9	36.2	40.5
C		19.4	55.8	122.7	166.2	197.2	1.9	4.9	11.4	36.0	41.9

5) 試験結果

コーティング肥料単独区では、初期生育がやゝ遅れたが、最終的には、対照区と比較して良好であった。またコーティング肥料と燐硝安加里のブレンド区は、生育初期から良好で、いずれの時期も、他区に比較し、優れていた。

高い実用性

以上の試験成績から、コーティング肥料が我家の菊栽培に十分利用できることを認めたので、本格的に本圃場で使用してみることにした。

成績の概要は、活着も大変良く、化学肥料にありがちな初期生育のでき過ぎ等もなく、揃いが良かった。初期生育は多少不足気味であったが、生育中期(11月下旬)頃には、慣行区と全く差はみられなくなった。その後も開花から収穫まで葉の色、光沢共に良好で、草姿も花首の太い逆三角形の素晴らしい品質のものに仕上がった。特にピンク系の品種は、開花時期に肥切れすると

5. ま と め

コーティング肥料は、全量基肥の肥培管理方式で、開花時期に入っても肥料切れを起さず、かつ濃度障害や肥料損失が少ないこと等から、我家のような地下水が高く灌水の必要がなく、追肥効果を十分期待できないハウス栽培での肥料としては、実用性は非常に高いと考えられる。

あとがき

9月号お届け致します。ご覧の通り、コーティング肥料特集ですが、対象作物はもっぱら花き花木を重点に編集致しました。今回は執筆者も巾ひろく、研究、指導、現場それぞれの立場からの論稿が寄せられて、なかなか実のあるものになりました。

去る8月30、農政審議会は、80年代の農業に関し検討中であつたものを一応取りまとめ、これを農林水産大臣あて報告しましたが、10月に再開して更に検討を加えたいと、12月に中間報告を取りまとめ、結論は昨年3月に結論を公表することになりそうです。

今回の検討の結果、注目されるのは、専業農家の生産基盤である農地の拡大を制約している農地法を改正してこれを緩和しようということと、外食産業を中心とする食品産業に対する行政の強化などありますが、一方では、構造的に野菜は作付け過剰気味であるということから、明年度からは、特定作物について生産調整を行なおうとする動きがあるなど、農業情勢は相変わらず予断が許されません。

(K生)